

平成1年6月1日

郷土あれこれ

郷土館だより
第27号

五日市町立

発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069

ぐん どう がみ 軍道紙の話



紙漉作業 栗原昇作氏夫人他 昭和28年

1 はじめに

手作りブームの波にのって、もと五日市町乙津地区の特産品軍道紙が見直されている。もっとも地場産業としての復活ではなく、「観光五日市」に一役買つての再登場である。

昭和62年、五日市町では町立の軍道紙工房を開設、技術保持者高野源吾氏を招いて手漉き作業の実演を行つては大変好評で見学者が絶えない。手作業にこもる人間の息づかい、和紙のもつ素朴な温か味等に惹かれるのであろう。当地区山村の副業として、ひとところかなりの賑わいを見せ、やがて時勢の波間に消えた「軍道紙」につき、改めてその盛衰を総括してみることにした。まずは紙の歴史から始めよう。

2 古代の紙—貢納のために生産

諸々の文化と同じく、紙もまた中国よりわが国に伝えられた。その時期は早く3世紀頃とされる。製紙技術の伝来はいささか遅れ、公式には推古天皇18年(610)という(日本書紀)。8世紀の奈良正倉院には膨大な紙の史料が残されているが、すでに高度な技術が開発されていたようである。平安期、朝廷は直営の紙工場を設け、諸国から貢納される紙原料を使って良質な紙を生産していたという。紙需要はまず行政記録や写経の用に発し、次第に上流階級の生活の隅々に広がつていった。紙づくりは器用な日本人の性に合うとみえ、古代の末(平安後期)には各地ですぐれた特産紙が産出されている。それらはみな荘園の民がつくり貢納品として都へ送られた。あの華やかなお

公卿衆の王朝文化は、庶民が寒風をついて作った和紙に負うところが多い。

3 中世の紙—領主による育成、大幅紙の発生

庶民の間から、そのリーダーとして台頭した武家は、権力を握ると公卿文化の後継者となり、紙の需要者となつた。彼等は公卿と違い地域に密着しているだけに、地域産業のパトロンとなり、各地の紙生産は伸展していったようである。当時続々と建立された寺社も有力な紙消費者となつた。紙を贈答品とする風習も定着した。

当地域では大幅(八王子市西寺方町)がこの中世期に有力な紙産地として現われた。大幅紙という名が伝えられている。恩方と川口の接点に当る大幅は山麓地帯で、原料こうぞの生産に適し、湧水が多く、前面に浅川の川

原を控えるといった生産適地であった。しかも付近には宝生寺以下有力寺院が多く、武藏守護代大石氏や後北条氏の拠点（案下城・八王子城）にも接していた。川口と隣接する五日市地方は、この大幡紙生産圏の周辺地区に当る。一つの紙生産地はその周辺に原料こうぞの供給地をもつことが多いが、そこもまた紙生産をはじめことが多い。おそらく中世の五日市地方は大幡紙の傘下にあって紙生産が行なわれていたことであろう。近世（江戸時代）初頭の五日市地区で、紙舟役（紙の生産に対する税）が課せられていた村が9ヶ村ある（養沢・乙津・戸倉・小中野・深沢・高尾・三内・伊奈・網代）。これらの村々は中世期に紙生産の実績をもつ村である。ところが江戸時代に入ると、このうちの大半が紙づくりを止め、紙舟役免除の歎願書を残している。これはどうしたことであろうか。一つには北条氏の滅亡による大幡紙の衰微を考えられる。中世の物資流通ルートは領主というパトロンを失うと混乱する。紙づくりを止めた村人はこうぞを桑にかえ、養蚕に転換したかも知れない。当時の山村の副業としては養蚕の方が一般的であった。こうぞも桑も同じ桑科の植物。いずれ貧しい副業という点では紙一重の差もあるまい。ところでこれらの村のうち、養沢川と秋川の落合の乙津村だけが自然条件に恵まれたうえ、技術の伝承もしっかりしていたものか、紙漉の業が残った。そして江戸時代を通じて、庶民生活の向上と産業の発達による紙需要の高まりに遭遇し、その生産を拡げていった。それが軍道紙である。

4 大幡紙から軍道紙—庶民の紙へ

軍道紙の「軍道」とは乙津村内の集落名である。文字はあて字で、崩土がなまつて「グンドウ」と呼ばれるようになったという説（『五日市町の古道と地名』郷土館発行）がある。確かに地形は山が崩れて養沢川の流路を押し曲げたような所である。この集落には紙漉を業とする者が多い。この「軍道紙」という呼称が、いつ頃発生したか判然としないが、おそらく八王子や青梅の荒物屋などに出荷する際の商品名で、比較的新しい（幕末期？）呼び名と推察される。生産者は軍道の他に下流域の落合地区にも多いが、あって軍道紙と名乗ったのは、ここに有力な生産者が集中していた為であろう。

江戸末期（文政期）に編さんされた『新編武藏風土記稿』の乙津村の項に「大畳紙トイフ紙ヲ漉出シテ生産ノ助トナス」とある。大幡との縁はとうの昔に切れているのに名だけは残ったとみえる。一昭和になっても土地っ子の間に大幡紙の名が使われていた。

名前談義はとにかく、中世の紙と近世の紙とでは用途に天地の差がある。紙は近世に入って、すっかり庶民のものとなった。軍道紙の用途は生産用として蒸した茶の葉を焼るホイロ紙に多用された。この為「端切らず」という別名もある。消費財としては筆簿用より生活用具に適し、障子紙の外、衣類等の包装に使われた。油をしませると唐傘紙や合羽になり、青梅傘用に売られたという。また漆や渋を塗って強化し、籠や藁製品にも貼った。郷土館には杉樽の目地に軍道紙を詰めた油樽がある。小説『大菩薩峠』に出てくる怪盗裏宿の七兵衛は夜道を疾走して目明かしの追跡をかわしたが、軍道紙をチューインガムのように噛んでは吐く癖があり、捕方はその吐き滓をたどって追ったという。

軍道紙はこうぞを原料とする素朴で丈夫な大衆用品である。奉書紙のように儀式張った高級紙と違って、根っからの庶民の紙であった。台所の流しの窓に貼られて北風を防ぎ、真っ黒にススけても破れないところに特色があった。

5 明治の軍道紙

軍道紙の最盛期は幕末から明治にかけてと思われる。軍道の旧家栗原秀年家に明治初年に賦課された営業税の調査資料があるので、それにもとづき表1、表2を作成した。

表1は農外収入の表である。どこの家でも行なっていた百姓仕事は現金収入をともなないので営業とはみなされない。その代り所有している田畠山林屋敷地に対し、地租が課せられ、その多寡により村内の社会的地位がきまった。村は地主（山持）、自作農、小作農の三階層に大別され、一握りの地主・山持がさらに土地を集め形勢にあった。とにかく山村では農業だけでは食べていけない。その為表1にみるような農間稼ぎを営むわけであるが、乙津村では合計139戸中、88戸（兼業をまとめた正味戸数）が各種営業に従事している。当時の農外収入は商業と手工業であるが、一般に職人衆は小作層の人が多い。乙津村は山村だけに杣職（林業労務）が多いが、この表でみる限り彼らの収入は気の毒な程少い。これに対し紙づくりに従事する家は村内の階層からみると、上

表1 明治13年 乙津村職業別戸数 (栗原秀年家文書)

職種	戸数	平均年収・円 (※は取扱高)
1. 炭職工(炭焼き)	13	42
2. 仲買商(糸・まゆ等)	21	※440
3. 質商	1	※694
4. 製造商(育林業等)	8	※503
5. 小売業(食料雑貨等)	21	※146
6. 紙工(軍道紙)	36	57
7. 紙商	1	※105
8. 鋳掛職	1	70
9. 請負職	3	51
10. 桶職	3	16
11. 桧(そま)職	10	17
12. 木挽職	2	23
13. 石工	2	32
14. 大工	1	28
15. 家根葺職	1	65
16. 疊職	1	35
計	125(兼業を統合 88戸)	
他に水車	8	

注) 1. 村役場への営業届より作成

2. 乙津村の全戸数139戸、他に寺院5、社家8。

表2 明治13年 乙津村紙製造業者及び年産額

地区	氏名	年産・円	地区	氏名	年産・円
軍道	栗原丹造	140	軍道	栗原太郎吉	132
タ	栗原政次郎	150	タ	栗原宇兵衛	115
タ	栗原清八	150	タ	鈴木佐仲	120
タ	栗原彦四郎	145	落合	鈴木藤左衛門	兼業
タ	栗原源太郎	兼業	タ	山崎源吾	60
タ	乙津菊治郎	75	タ	栗原弥治郎	63
タ	栗原周造	85	タ	山崎惣兵衛	83
タ	栗原政五郎	34	タ	栗原三右衛門	34
タ	乙津源次郎	69	タ	栗原勘兵衛	40
タ	栗原治左衛門	100	タ	山崎六左衛門	43
タ	栗原重郎治	兼業	タ	山崎長右衛門	65
タ	栗原源右衛門	84	タ	高野五郎右衛門	140
タ	栗原伝吉	73	青木平	浦野吉治郎	69
タ	栗原与七	36	タ	市川茂左衛門	72
タ	沖倉惣左衛門	61	タ	市川助三	兼業
タ	沖倉平右衛門	95	乙津	乙津安奈	15
タ	栗原太右衛門	102	タ	乙訓徳左衛門	35
タ	栗原太郎右衛門	91	タ	乙津清右衛門	69
タ	栗原徳兵衛	64	タ	山崎金造	兼業
タ	栗原次郎吉	104	合計	39名	82.7(平均)

注) 1. 村から西多摩郡長への報告書による。

(表1)より金額、人数とも増えている。

中層を多く含む(表2参照)、とくに軍道地区では2軒に1軒が紙づくりに関係し、有力者を網羅している。紙づくりにはこうぞの植付地からはじまって、作業に一定の広さをもつ屋敷地が必要である。また助手としての女手も欠かせない。養蚕農家に似た条件を備えていなければならぬ。実は紙漉は漉く際に混入するねり(とろろあおいの粘液)の関係で冬の仕事となる。春夏の農耕・養蚕と組合せ、1年を通して稼ぐのに好都合であった。中には紙づくりと糸まゆの仲買を兼ねる者もいた。いずれにせよ冬期の副業として、農閑期を利用できる点が紙づくりをふやした理由の1つであった。

明治初期と幕末とでは社会生活の様相に大きな差はない。この2つの表は、そのまま江戸末期に逆のぼらせることができ、当時軍道紙が地場産業として如何に大きな比重を占めていたかを物語っている。

6 軍道紙のおわり

ひところ日本全国至る所で生産されていた手漉和紙は明治後期、洋紙の普及によって頽勢に追い込まれた。手工業が機械工業によって淘汰されるという原則は紙の世界も例外ではない。とくに第一次大戦によって工業化を一段とすすめた大正期以降、日常生活の隅々まで洋風化が進行した。ペン書きや印刷に不適な和紙はここでも需要を失った。軍道紙生産者の中には真白なパルプ洋紙に少しでも近づけようと漂白剤を多用し、紙質を弱める者も出た。田舎娘が流行におくれまいと厚化粧し、素肌の健康新美をそこねたようなものであった。

第2次大戦後、4,5軒残った生産者は機械導入によって省力を計り、こうぞに混ぜものをして原料の增量を計ったりしたが、品質をそこね、かえって評判を落した。かくて悪戦苦闘のすえ次ぎ次ぎに廃業し、最後の生産者高野源吾氏が家業をたたんだのは昭和39年であった。

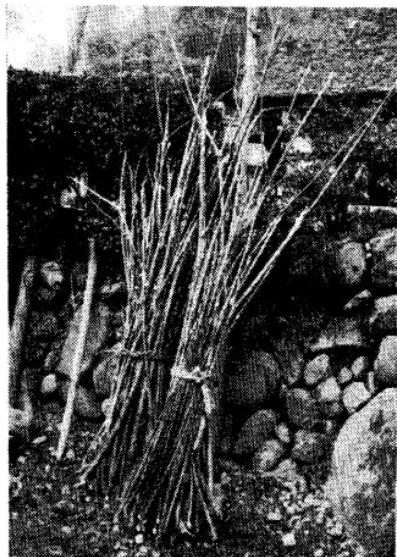
いま大量生産の洋紙にあきたりず、手漉和紙のもつ人肌の温か味に惹かれる者がふえてきた。中でも軍道紙は素朴さが好まれた。一だが、熱心なファンが出現したとき、肝心のこれを作る者は消滅していた。

7 目で見る軍道紙の原料づくり

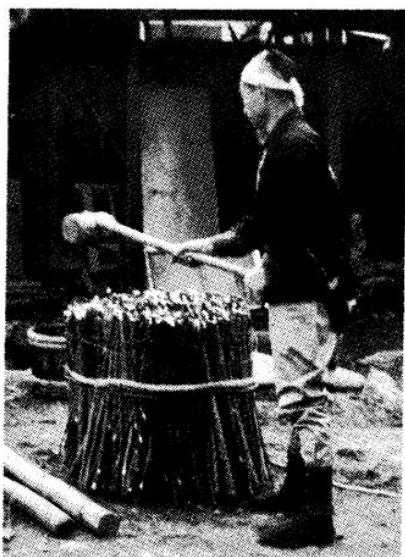
こうぞ がんび みつまた
和紙は楮・雁皮・三桠などの樹皮の纖維をほぐし、これを漉いて作る。軍道紙原料の楮は最も強い。工程は、1刈取り、2蒸し、3皮むき、4表皮削り、5白皮の川晒し、6煮る(ソーダーを入れ約4時間)、7アクリ抜き(川でゴミを取りながら洗う)、8叩き(ゆっくり長時

間) 以上により繊維がほぐれる。これに、ねり(とろろあおいの根をつぶして得た粘液) を混ぜ、水に溶いてよ

うやく漉く段取りになる。紙づくりは漉きはじめるまでのお膳立が大変なのである。



1. 刈ってきたこうぞ



2. 切りそろえて束ねる
(高野源吾氏)



3. 桶をかぶせて蒸す



4. 蒸しあがったこうぞ



5. 黒皮、上の棒は燃料にする



6. こもじの皮むき 昭和28年



7. 白皮の川晒し